

令和6年度（2024年度）第1回千葉県体育学会大会 抄録

<一般研究>

来日留学生の身体活動量と健康状態

○行徳玲（筑波大学人間総合科学学術院スポーツ国際開発学共同専攻）、小泉佳右（千葉大学大学院国際学術研究院）

日本に来る外国人留学生は、住み慣れた場所とは異なる環境での生活を強いられるため身体的および精神的なストレスが生じやすいといえる。一方で、運動は生活習慣病の予防や生活の質やQOL、メンタルヘルスの向上が見込まれ、身体的および精神的に好意的な影響を与えられている。本研究では、留学生の健康状態と身体活動量について調査するため、留学生31名と留学生ではない学生41名を対象に身体活動量の計測とSF-36v2を用いた健康関連QOLの測定を実施した。留学生群では、留学生ではない学生群に比べ、総睡眠時間が長く、SF-36v2の調査においては身体機能、日常役割機能（精神）、社会的機能の項目で低いスコアを記録した。留学生の中での活動上位群と活動下位群では、有意な差は見られなかったが、日本人を含めた包括的な健康を維持・向上するためのサポートが必要である。

15人制ラグビーのボール争奪局面における防御戦術の検討-22mライン間の密集からのボール出しに要する時間に着目して-

○廣瀬恒平（尚美学園大学）、千葉剛（防衛大学校）、澤田大地（千葉経済大学付属高等学校）、高橋仁大（鹿屋体育大学）

近年、ラグビーでは「ブレイクダウン」と呼ばれるボール争奪局面における攻防が、勝敗を分けると言われるほど重要性を増している。世界トップレベルでは、このブレイクダウンに人数をかけない傾向にあるとの報告がある一方、防御側がブレイクダウンに人数をかけ、攻撃側のボール出しの時間を遅らせようという指導が、現場では散見される。そこで、本研究ではブレイクダウンのボール出しに要する時間およびタックル後のプレー状況に着目し、有効な防御戦術についての知見を得ることを目的とした。分析の結果から、ボール出しの時間を遅らせるには、防御側の人数を増やすのではなく、攻撃側に多くの人数をかけさせることが重要であると示唆された。また、タックル後のプレーでは、ジャッカルが有効であり、1stタックラーのオーバーは有効であるものの2ndタックラーのオーバーは有効ではないと示唆されたことから、タックル直後、可能な限り素早くボールや相手に働きかけることで攻撃側に圧力をかけ、人数をかけさせることにつながるということが重要であると示唆された。

残塁ありのベースボール型ゲームにおける守備のプレー選択の傾向～小学校5年生を対象に～

○高橋明日美（千葉大学大学院）

本発表では、戦術的な思考・判断に基づくプレー、チームとしての連携を引き出すことを意図して走者を残したベースボール型ゲームを実践し、児童の守備に関する「わかる（認知）」と「できる（技能発揮）」の実態を調査することを目的とした。検証授業は、技能が低い児童に対しても進塁の機会を保障することを意図して塁間の長さを調整したベースボール型の教材「変形ベースボール」で実践を行った。単元戦後の戦術認知テスト、作成したプレー分類表に基づくプレー分析を合わせて行った結果、捕球後のプレー選択に関して、プレー関与割合が中位の群では児童の「わかる（認知）」と「できる（技能発揮）」に向上が見られ、役割の伴うプレーの増加が見られた。プレー関与割合が少ない群には変化が見られない中、唯一向上が見られた児童が走者に合わせて送球をうける塁を選択する動きをしていたことから、役割行動をする中で間接的に守備における戦術的な思考・判断を学んでいたことが推察された。

休日の部活動の地域移行に関するアンケート調査～市原市の事例～

○馬場宏輝（帝京平成大学）

中学1・2年生では部活動に所属しているのが86.5%で、入部の理由は「活動が楽しそう」が66.0%であった。部活動に入部して良かったことは「活動が楽しい」が66.7%であった。部活動をしていて悩んだことや困ったことは「もっと上手になりたい」が49.4%であった。地域クラブ等に加入した理由では「活動が楽しそう」が36.1%、「専門的な指導を受け、自分の技術を向上させたい」が49.4%であった。地域クラブ等に所属して良かったことは「高いレベルの活動ができる」が51.4%であった。どのような条件であれば休日の地域クラブ等の活動を行いたいかわでは「大会を目指すのではなく、趣味程度で楽しくできるクラブがあると良い」が43.0%であった。保護者の「月謝が発生する場合の妥当な金額」では「1,000円以上～3,000円未満」が52.2%であった。教職員の「学校部活動を地域クラブ等が担うことについて期待すること」では「教員の負担軽減」が85.5%であった。市原市水泳協会は「市内にスイミングクラブが複数あるため、地域移行はすでに行われていると考えます」と回答した。

<実践研究>

中高年齢者対象運動サークル活動中の水分補給内容について

○井上哲朗（国際武道大学）

近年では、運動時の水分補給の重要性は広く知られるようになり、熱中症予防の観点からも積極的に水分補給することが推奨されている。本研究では、中高年齢者が、運動サークル活動時にどのような水分補給を行っているか調査を行った。

その結果、運動サークル活動時に飲み物を全員が持参していたことから、運動時における水分補給の重要性は理解していた。自宅から水筒で飲料を持参する方の多くは、水道水や自宅で作ったお茶などを持参している人が多く見られ、節約志向がみられた。その一方、運動時のナトリウムの補給に関する意識については、やや低いと考えられた。

特に暑い時期の運動サークル活動時には、水分の種類や量に注意することが必要であると考えられた。

<授業研究>

ゴルフ場運営管理会社（PGM）と連携した医療スポーツ系学生に対する「共有・共感・協同」を軸とした課題解決プロジェクトの実践と学習成果の可視化

○庄司一也（帝京平成大学）

2022年度に引き続き、2023年度もパシフィックゴルフマネジメント株式会社と連携した教室完結型の課題解決プロジェクト（≡課題解決型インターンシップ）を本学医療スポーツ系学生に対して実施した。

2023年度は前年度の課題を踏まえるとともに、他科目でも力を注いでいる「共有・共感・協同」を軸とした教育・学習を実践した。この結果、高い学生満足度・理解度のほか企業からも高い評価を得た。

そして本プロジェクトの学習成果をテキストマイニングツール（KH Coder 3 使用）と生成 AI（Bing Chat Enterprise 使用）によって可視化した。

本発表では上記取組を報告し、成果と若干の課題を考察した。